

---

# ムルキベルの牢獄

仲峰 良

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ムルキベルの牢獄

### 【Nコード】

N8696C

### 【作者名】

仲峰 良

### 【あらすじ】

天才の子供は天才とは限らない。稀代の歌姫と呼ばれた母と有名なヴァイオリン奏者である父の間に産まれたルツカは周囲から歌姫としての将来を囑望されるが、実は破壊的なまでの音痴。物心ついてあっさりと歌姫への道を諦めた彼女が、入学した王都のアカデミーで出会った変人達と繰り広げるドタバタファンタジー。

## 始まりの話

親が天才だからといって、その才能が子供に受け継がれる事はまず、殆ど無いと言えるだろう。

天才は遺伝しないのだ。

けれど、何故か世間では天才の子供は天才であると認識されがちで勝手に出来もしないことを出来ると思いきまれる傾向がある。

そして、何故か自分が天才な親に限って「どうして私の子供なのに出来ないの」とか「こんな簡単な事も出来ないのか」と言い出したりするのだ。

我が家は音楽一家で母は稀代の歌姫と言われた人物で、父はかつて王都で貴族にヴァイオ

リンを教えていた名の知れたヴァイオリン奏者。

そんな二人の間に十六年前、一人娘として生を受けたのが私、ルツカ・フォーレスだったりする。

父と母は産まれたばかりの私を見て勝手に「この子は間違いなく稀代の歌姫になる！」と、かなり喜んだらしい。

・・・実の娘の私が言うのもなんだが、アホだ。

かなり短絡的な思考と見えよう。

けれど、そんな二人は私の成長と共に目を逸らせぬ現実に直面する事になる。

もしも、産まれた子供をその道のスペシャリストにしたいのなら、親ならまず誰でも考える事だろう。

子供には良い環境と良い経験を。

恵まれた環境は人を育てるものだ。

特に歌や音楽など芸術面に関して言えば、感受性や芸術性を磨く事が大事だろう。

幼い頃は過度なストレスは禁物。  
なので、あまり無理強いをされることは無かった。

両親に時間が出来れば散歩に行き、本を読み、母と歌を歌った。

正直、幼い頃の私がまともに歌を歌えていたとは思わない。

だが、母も父も私が歌を好きになればいいと考えていたらしい。

音程を間違えようが、歌詞を間違えようが、途中で止めようが特に怒られた記憶は無い。

父と母はいつも微笑んでいた。

そのおかげで、私も歌は好きだ。

歌う事も、聞くことも好きだ。

けれど、私は・・・極度の音痴なのだ。

音痴は治せる。と人は言うけれど、その論理は私には通用しない。

鼻歌ですら友人達には必死で止められるのだ。

もう、音痴とかそんなレベルじゃないんだと思う。

ぶっちゃけ、歌うと鳥が落ちてくるとありえない話だ。

人間よりも耳の良い動物達は私の鼻歌ですら逃げる。

本気で歌うと人すら倒せる。

これについて友人のアーティアカは「ルツカちゃんは人って言うか、既に兵器だよな」と笑う。

否定はしない。

自分としてはかなり酷い事を言われていると言う認識はあるのだが、それが事実で否定できない事なのだからしょうがない。

何を隠そう、私が人生で始めて気絶させたのは母だ。

両親はその惜しみない愛でもって私を育ててくれた。

私は存分にその愛に守られ、ゆっくりと歌姫への道を昇っていたと言えよう。

けれど・・・。

あれは、忘れもしない八歳の冬。

王都に出かけた父の帰りを待ちながら、母はいつものように暖炉の側で私を抱えて歌を歌って

ていてくれた。

そして、母が歌い終わった後、幼い私は小さい子供がするように母の真似をし歌い始めたのだ。

それは、必然的だったと言えよう。

それまで、母や人に合わせて歌を歌った事はあった私だが、幼いながらも自分でも自分の

歌い方が他人とは違うと自覚が多少はあったのか、それが恥ずかしくて決して一人では歌わなかった。

また、人に合わせて歌う時もいつも小さな声で歌っていたので、自分で意識して「人に聞かせ

よう」と思っ歌ったのはこれが初めてだった。

幸い、聞く人は母しかいない状況。

私は今までに無い大きな声で歌を歌った。

・・・母は白目を向いて気絶した。

ちなみに、後日王都から戻った父も母の訴えに最初は笑っていたが、試しに私が歌うと気絶

した。

八歳の私は、ああ、ヤバイな。と思った。

案の定、父と母はその日からスパルタ教育を開始し、私の音痴矯正に躍起になった。

けれど、その努力が実を結ぶ事は無かった。

八歳からの八年間。

私はそれこそ色んなものを試された。

医学的な矯正法から、怪しい黒魔術系まで。

まさにピンからキリまで。

途中から両親は開き直っていた節もある。

が、やはり開き直っても諦め切れなかったのだろう。

「姉さん達も、いい加減諦めればいいのに」

時たま王都に住む叔母が我が家を訪れると、叔母は必ずそう言って溜息をついた。

私自身も十になるかならないかで自分の音痴は一生治るまい。と思つて別の将来を考え始めたというのに、両親は非常に諦めが悪かった。

それは、今でも変わらない。

けれど、私はこの春、王都の全寮制のアカデミーに通う事が決まっている。

私が居なくなれば両親も落ち着く事だろう。

私としても怪しげな薬やら踊りやらを日常的に試される生活には嫌気が差していたので丁度良い。

私が王都に行く事が正式に決まった時、猟師をしているオータムさんは言った。

「ルツカちゃんが無くなったら、また銃や毒で猟をしなくちゃいけないくなるな」

私は「頑張つてね、オータムさん」と笑顔で言ったが心の中では「それが当たり前だろう」とツツコンでいた。

どうにも私の歌声はそれを武器とする事に向いているらしい。

山に入って歌えば、空飛ぶ鳥は落ち、獣は気絶する。

毒も銃も使わずに無傷で獲物を得られるのだ。

そりゃあ、重宝されたものだ。

アーティアカと河に遊びに行った時に、一度ふざけて水中で歌ってみたら、失神した魚が一斉に水面にプカ〜ッと浮いた事もある。

「凄いよ!!!ルツカちゃんが歌ったら水中でもびりびりきたっ!」

アーティアカは無邪気にはしゃぎながら、今日の夕飯にとせっせと魚をかき集めていた。

何ていうか、もうここまで来るといっその能力を駆使して猟でもしながら生活したほうが一生安泰なんじゃないかと思えてくる。

と、言うか私は齡十六にしてその道を真面目に考えていた。両親に泣いて止められたのだが。

「獵師になるかならないのかを決めるのはアカデミーを出た後でも遅くは無いからっ!!」

「そうだよ、ルツカ。アカデミーに行けばもつと違う道も開けるかもしれないだろう?」

あからさまに両親はヤケクソだった。

けれど、何年も私の為に世界を駆け回ってくれた両親を振り切つてまで獵師になろうとも思つていなかった私はあっさりとアカデミーへ行く事を承諾した。

ちなみに、アカデミーにはアーティアカも来る。

アーティアカはその見た目と言葉のせいで非常に幼い印象を持たれ、尚且つ馬鹿にされることも多いが、実はかなり頭の良い子だったりする。

将来は薬師になりたいと言う彼女は私と同じアカデミーの「薬学科」に入るらしい。

私は母が「音楽科」と書いたのをこっさり「普通科」と書き直して書類を送った。

違う道、と言いながらも、ちゃっかり「音楽科」に入れようとする両親が怖ろしいものだ。

一度決まった科を選択してしまうと、アカデミーを辞めない限りその科から他の科に変更出来ない。

けれど、アカデミーに入る生徒の誰もが決まった道を思い描いていくわけではないので、アカデミー側はそんな生徒達の為に二年の期間を設けていた。

「普通科」は俗に一般科とも言われており、他の専門の科と違って一般教養の中に他の科のプログラムをちょこちょこ組み込んでいる。

生徒達はその中から自分の進みたい道を決めればいい。

在学中に進みたい道が決まった場合「普通科」の生徒のみは次の年

から専門学科の一年に入りなおすことが可能。

また、無事にアカデミーの各専門学科を卒業したものは安定した職業につけるのだ。

素晴らしい事だ。

私も出来れば一年経たずに自分の進むべき道を見つけて、早く安定した職に就きたいと思う。

職についてしまえば、両親も諦めてくれるだろう。

歌は嫌いじゃない。

出来れば歌いたかった。

けれど、無理だと分かりきっているものをいつまでも夢見ていられるほど、私は子供では無くなったのだ。

歌は上手い人が歌えばいい。

それだけの話だ。

## メルツアーラ・アカデミー【1】

「では、ルツカさんはこちらの305号室ね」

入居者の名前と部屋番号の書かれた手元の書類に目を通しながら、寮母のアネットさんが部屋の扉をノックした。

「ルームメイトはイシエリカ・チェンバスさん。ノームウエーナの方よ」

私は驚いた。

ノームウエーナと言えば大陸の北にある巨大な離島だ。

移動手段は船のみとされ、その為、大陸にはノームウエーナの情報があまり入ってこない。

空から飛空艇や召喚獣を使って渡ろうにも、特殊な結界があるらしくて辿り着けない事で有名だった。

ノームウエーナに暮らす人々は独自の国家を築いていると言われることもある。

それ故に独特の言葉も操ると噂される。

「イシエリカさんは一昨年の夏に大陸に来たそうよ。共通語もとても上手なの」

私がノームウエーナと言う単語に驚いた事を察して、アネットさんは微笑む。

「はい」

がちやり。

部屋の中から高い声が聞こえ、部屋の扉が開いた。

扉の隙間から顔を覗かせたのは紺色の髪に鮮やかな青い目をした少女。

少女は扉を叩いたのがアネットさんだと気付くと「こんにちは」と笑顔を見せた。

「こんにちは、イシエリカさん。今日は前から言っていたルームメイトの方を紹介するわね」

言われて、少女 イシエリカ は「ああ」と、扉を大きく開いた。

「こちら、フィーリからいらしたルツカさん」

アネットさんが私を紹介する。

私は荷物を置いて、笑顔で右手を差し出した。

「今日からお世話になります。ルツカ・フォーレスです」

「こちらこそよろしくお願ひします。イシエリカ・チエンバスです」  
イシエリカが私の右手を握り返す。

「それじゃあ、イシエリカさん、ルツカさんをお願いね」

「はい」

「それと、これがこの部屋の鍵。無くさないでね。基本的に余程の理由が無ければスペアキーの作製は禁止。もしも、どうしてもスペアキーが必要な場合はアカデミーの事務に申請してね」

アネットさんはそう言っつて、手元に持っつていた書類と鍵をくれた。

「ありがとうございます」

書類と鍵を受け取り、アネットさんの背中にお辞儀して、私は荷物を持ち上げる。

イシエリカが笑顔のまま、扉を支えてくれていた。

「どうぞ」

促されるままに部屋の中に入る。

初めて見た部屋の中は二人用の部屋にしてはそれなりに広く、ドアの正面には大きな出窓があり、左右にそれぞれ同じ配置でシンメトリーのように机とベッドが置いてある。

真ん中には落ち着いた若草色のカーペットが敷かれ、焦げ茶色の座卓が置いてあつた。

「ごめんね、私二ヶ月前から居たから結構部屋の中、好き勝手しちゃつてるんだ」

左側の手を付けられていないベッドの横に荷物を置いた私の背にイシエリカが言っつてくる。

「フィーリから来たんじゃない長旅で疲れたでしょ。今、紅茶入れるから良ければ座つてて」

「ありがとう」

私は上着を脱いでカーペットの上に座った。

「本当にごめんね。何かババ臭い趣味で」

あはは、と笑いながらイシエリカが部屋に備え付けの小さなガス台でお湯を沸かしていた。

「ああ、そうだ。此処で簡単な調理は出来るからね。必要なものは一通りあると思うから良かったら、いつでも使って」

私はもう一度「ありがとう」と言って部屋の中を見回した。

出窓にはアイボリー色のカーテンがかかり、イシエリカのベッドには浅葱色の天蓋が掛かっていた。

「お国柄って奴よ」

私が珍しそうに部屋の中を見ていたのに気付いてイシエリカは笑った。

「アネットさんに聞いた？私がノームウエーナの出身って」

「うん」

「ノームウエーナはこちらの大陸のように発展してない部分も多々あってね。染色なんかはその最たるものの一つ」

言いながらイシエリカが湯気の立つカップを手渡してくる。

「人工色って殆ど無いからね、カーテンとかシートとか全部自然色なのよ。草木で染めるの」

座卓を挟んで反対側に座りながらイシエリカは視線を出窓にかかったカーテンへと向けた。

「二ヶ月間も一人で住むって話を寮に入った時にアネットさんにされてね、故郷に手紙書いて送ってもらったの。でも、気に入らなかつたら言ってくれていいからね。はっきり言って大陸の人のセンスとは掛け離れてる事は分かってるし」

私は首を横にふった。

「ううん。このままでいいわ。色合いとか雰囲気叔母の家に似ていて何だか落ち着くし。ねえ、王都でもノームウエーナの布って手に入る？」

「そりゃあ、お店は何軒か知ってるけど、どうして？」

「私も出来ればこの部屋の色合いに合わせたシートとか欲しいなと思っただの」

「本当！？とイシエリカが身を乗り出す。

「え？ええ」

あまりの勢いに私は後方に仰け反った。

「良かった。ルツカが、ってああ、呼び捨てでいいよね？」

うん。と私は頷く。

「私の事も呼び捨てで構わないからね。で、ルツカがそう言ってくれて。本当の事言っと私ね、もしもルームメイトがこの部屋馬鹿にするようなら部屋を変えてもらおうと思ってる」

・・・ちよつと、待て。

ついさつき「気に入らなかつたら言って」とか言っただその口で何を言ひ出すんだ。と私は思った。

「いやあ、正直、どうにも大陸の人の色彩感覚と違って合わなくてさ」

確かに大陸の人間はどちらかと言うと自然色よりも人工色を好む傾向が強い。

特に位が高ければ高いほど、身に纏うものや普段使いのものの色が鮮やかな原色に近づく。

大陸では赤・紫・黒・金の四色が正式色と定められており、人々から切っても切れない色とされる。

王都なんかは王のお膝元であるが故に特にその四色の比率が高い。

圧倒的に派手で目立つその色彩が王都では高貴な色、位の高い色と認定される証でもあるからだ。

「初めて大陸に来て王都を見た時は目が、しばしばしたわ」

「ああ、それは分かる」

私も幼い頃に父に連れられて初めて王都に来た時は、慣れぬ色合いの街並みにくらぐらした。

私の暮らしていたフィーリは割と田舎で、森や溪谷、河なんかもある

つて自然の多い地域だ。

家の屋根の色や壁の色も落ち着いたものが多い。

まあ、それでも五軒に一軒は赤い屋根のお家やら、玄関の枠の色が金色、なんて家もあるにはあった。

でも、それは王都の比では無い。

はつきり言つて王都は私の目から見ても、かなり趣味が悪いと思う。並ぶ屋根の殆どは多少の明暗はあるものの基本的に赤。

時々、紫。

大通りの道に敷かれた煉瓦も赤煉瓦使用。

壁も赤煉瓦が基調。

枠の縁取りは金色。

慣れてしまえばそれが当たり前なのだろう。

けれど、田舎暮らしの私には慣れるまで時間が必要だと思う。

ここで、せめて部屋の中だけは落ち着いた色にしたいと思うのは普通の感性だと思う。

「これで、アカデミーの制服が赤だったら泣いてたわ」

イシエリカが壁に掛けた制服を見ながら呟く。

紺に近い青のツーピース。

「でも、濃い色である事には変わりないよね」

私が言っているとイシエリカが「うん」と言つて溜息をついた。

「でも、紫とか金よりマシだわ」

「・・・確かに」

キラキラ輝く金色の制服を想像して、私は顔を顰めた。

それから私達はお互いの故郷の話や家族の話を適当に交わし、入学式までの一週間の内に布を買いに行こうと約束した。

明日は後から送った荷物が届くので、午前中にアカデミーに制服を取りに行つて午後から荷物を片付ける予定だ。

「薬学科」に入ったアーティアカは別の寮に入ったので、明日の朝中央広場で待ち合わせてアカデミーに行く事になっている。

「新しいの買うまでは、良ければそれ使つて」と夕食後にイシエリ

力がベッドの下から出してくれた予備のシーツと枕カバーを借りて、その日は早めにベッドに入った。意識が落ちる寸前までイシエリカとは会話をしていたが、私の名字を聞いても父や母の名を出さないイシエリカに私は心の底から安堵していた。

\*

次の日。

早め目に制服を受け取って、出来れば昼食も外で済ませたいと思っていた私は九時には広場に着いてアーティアカを待っていた。

程なくして、右から二番目の大通りからアーティアカが走ってくる。

「ごめんねー、ルツカちゃん」

十六歳の女の子の標準的体格よりも小柄なアーティアカはまるで小動物のようだ。

懸命に走る姿はハムスターを想像させる。

ふわふわした薄茶の髪も、くりつと大きいアーモンド型の目も、より一層小動物を連想させる要因だ。

何とも男の庇護欲を駆り立てるような存在。と私は常々思っている。そして、その思考はあながち間違いではない。

走り寄ってくる彼女を振り返って見る男の姿がちらほら。

けれど、アーティアカはそんな視線にも気付かずに懸命に走る。

「お、お待たせ・・・」

ハアハアと全身で呼吸をし、アーティアカは笑顔を見せた。

「昨日の夜ね、同室の子とお喋りしちゃって」

起きたら八時半だったの。とアーティアカは続ける。

私はアーティアカの呼吸が落ち着いたのを見て歩き出した。

「でも、うちの寮がラクストン寮よりも広場に近くて助かったよー」

「あれ？メルレ寮がアカデミーが一番近いんだっけ？」

「そうだよー」

ラクストン寮と言うのが、私の暮らす寮で、メルレ寮はアーティアカの入った寮の名だ。

アカデミーは生徒数が多い。

そして、各専門学科の数も多い。

それらの全ての学年の生徒が全員寮生活をするので、王都のアカデミー地区には大小合わせて二十近い寮がある。

基本的に寮の生徒は大まかな専門学科の分野の違いによって選別される。

ラクストンはその中でも「普通科」を基準に「文学科」「歴史科」

「政治科」などの比較的似通った分野の生徒が暮らす。

ひたすら勉強に打ち込むタイプの学科が多いらしい。

メルレはアーティアカのような「薬学科」に進んだ生徒や「医学科」

「医療術式科」「看護科」などの分野の生徒が暮らしている。

他にも、ヘリストン、マーチル、ラッセル、ジレトラルなどの寮があり、それらは全てアカデミーから放射状に伸びる六つの大通りの中に点在しているのだ。

どの寮の生徒も大通りを經由してアカデミーに行くには必ず中央広場を通る。

故に広場から一番近い寮はアカデミーからも近いと言うこと。

私達はアカデミーに続く中央通りを、他愛も無い会話を続けながら進んだ。

「流石に春休みだから生徒がいないね」

「明後日辺りからは賑わうって寮母さんが言ってたけど」

今朝、食堂で朝食を食べていた時にアネットさんと会話していて、そう聞いた。

「そっかぁ。アカデミーが始まったらこの通りを制服着た人がいっぱい通るんだよね」

目をキラッキラさせながらアーティアカは「楽しみー」と笑って兎

のようにぴよんぴよんと飛び跳ねた。

「フィーリの学校は制服なんて無かったもんね」

「そうだね」

フィーリにも学校はあった。

けれど、所詮は田舎の学校。

定められた制服もなければ子供の数も少ないので、集められた子供達は年齢も性別もバラバラで皆、同じ部屋で教育を受けていた。

勉強をしていると言うより協調性を養っているといった程度。

「ねね、ルツカちゃんももう制服見た？」

飛び跳ねるのを止めたアーティアカが振り向く。

「うん。見たよ」

「いいなー。私、同室の子も一昨日来たばかりでまだ制服貰ってないんだって。どんなのだった？」

「どんなのって言われてもね。比較の対象が無いから何せ、制服と言うものが初めてだ。」

これで二人とも他で似たような物でも見たことでもあれば説明も出来るが、その経験も無いので難しい。

「んー。そうか、そうだよ。じゃあ、質問を変えよう。色とかデザインはどうだった？」

「色は紺に近い青」

「綺麗な色？」

「うん。上品ではない。お貴族様が好みそうな青色」

「デザインは？」

「ツープイス。上はブレザーで、スカートは二種類。タイトとプリーツがあって、好きな方を選ぶらしい。ブレザーの襟に各専門学科の学学科章と学年を表す校章をつけるんだって、同室の子が言っていた」

「・・・何か、可愛いかも」

「デザインも悪くなつたよ」

くうくうとアーティアカは両手を拳に握って、また飛び跳ねる。

「早く見たい！寧ろ、着たい！」

ぴよんぴよんと跳ねながら、アーティアカは揺るやかな坂を器用に上っていく。

「ちゃんと歩かないと転ぶよ」

子供の頃からアーティアカは落ち着きがなく、何も無い所でよく転ぶ子だったので私はいつものように注意する。  
が……。

「大丈夫だよ！！……う？あひゃっ！」

案の定、アーティアカは笑顔のまままで凹凸のある石畳に足を引っかけ盛んにすつ転んだ。

私は「ハア」と溜息をついて、その小さな身体を抱き起こす。

もう、その作業も手馴れたものだ。

「私はアーティアほど期待を裏切らない子を知らないわ」

「ひゅいまへん……」

転んだ際に鼻でも打ったのか、赤くなった鼻を押さえたまま涙声でアーティアカは謝った。

「いたひ……」

うつつと痛みに耐えるようにアーティアカが俯く。

「鼻血は？」

「だいひょうふ」

私は上着のポケットに手を突っ込んだまま、アーティアカのスカートから伸びた足を見た。

特に怪我は無い。

「ごめん、行こう」

俯いていたアーティアカが目の淵に溜まった涙を袖口で拭いながら言った。

「ほれ」

鞆に入っていたハンドタオルを渡すと、「重ね重ね、すみません」と言いながらも受け取る。

長い付き合いの中でアーティアカが、その見た目に反してかなりず

ぼらな性格である事も私は充分に知っていた。

「えへへー。ルツカちゃんといると楽だなあ」  
ぺしっ。

「あうっ」

へらへらと笑うアーティアカの頭を軽く叩いて「行くよ」と私は歩き出す。

楽しいでも面白いでもなく「楽」と言い切るこの幼馴染に、私は心の中で溜息をついたのだった。

## メルツアーラ・アカデミー【2】

アカデミーに「普通科」は六クラスある。

それらは全てアカデミー本棟にあり、六階の右端の三教室がA、B、Cクラス。

その直ぐ下の五階にD、E、Fクラスの教室があるといった具合。一クラスの生徒数は男女合わせて三十人から三十五人。

つまり「普通科」の生徒だけで約二百人近い生徒が居ることになる。そんな中で、私とイシエリカは奇遇にも同じAクラスになった。

しかも、何故か公平にくじ引きで決めたにも関わらず、席も隣だったりするから驚いた。

「此処まで一緒だと運命共同体って感じだねー」

特にお互いの意向を聞いて選んだわけでもないのに自由選択できる専門教科までも一緒だったりすると、まさにそんな感じで私も思わず笑ってしまった。

入学式を桜舞い散る中に無事に終えて、十日目。

今更ながらに、最後の選択教科の講師と顔合わせし、渡された教科書を机の上で整えながらイシエリカが笑いかけてきた。

「ルツカ、今日のお昼どうする？」

「購買か、食堂か悩んでる所」

私は揃えた教科書を机に終い、机に頬杖をついて答えた。

脳内には既にアカデミーの食堂と購買を思い浮かべている。

アカデミーには全生徒を収容できるほどの巨大な食堂があり、メニューもかなり豊富ときている。

専門学科の棟が立ち並ぶ中にドンと居を構えているのが食堂館。

三階まで吹き抜けのホールになった建物の中の一階は食堂。

二階からはカフェや軽食を出すお店になっていて、生徒や教師が好きな物を食べれるようになってる。

「こつも広くて色々あると悩むよね」

「うん。購買も三軒ぐらいあるからね」

普通、購買と聞くと頭に浮かぶのは菓子パンやおにぎり、サンドイッチなどを多様に扱ったものが出てくるのだが、何せアカデミーは人が多い。

一つの購買では廻りきらない事を見越して、パン、米類、麺類の三種の売り場が分かれていたりする。

ちなみに飲み物は何処でも買えるのだが、何故かそれぞれの売り場でしか買えないレア物もあつたりして結構、困る。

どうにも購買、食堂同士で張り合うのが好きなようだ。

商売気質、とでも言ったものか。

「うう、今日は天気も良いから外で食べたいな。でも、そうすると購買に決定だけど、果たして何を食ようかね？」

窓の外の青い空を見やってイシエリカは唸る。

窓の外では散りかけの桜の花びらが風に舞っていた。

こんな日は、風に舞う桜を見ながら食事するのも風流で良いな、と思う。

「気分的にはパンかなあ・・・」

「サンドイッチ？菓子パン？」

「・・・ねえ、アネト」

伸びをしながら訊ねてくるイシエリカにどう返答したものか悩んだ私は後ろを振り返った。

「ほいさ」

私の声に、それまで机に広げたノートに何事か書き込んでいた赤毛の少年が勢いよく顔を上げた。

アネト・セパーズ。十五歳。

方々に跳ねる赤毛と、そばかすが散った顔で猫のように笑う、愛嬌のある少年だ。

「何か用かい？ルーにイシエ」

彼は何故か人の名前を短縮して呼びたがる癖がある。

「あのさ、今週のパン屋のオススメって何？」

「ちよつと待って」

言いながら、アネットは今まで何か書き込んでいたノートを捲り出した。

「ああ、今週はフランスパンのチーズサンドがオススメだよ」

「んー。チーズかぁ。ちなみに米と麺は？」

「米が小豆のリゾット、麺は黒胡麻と生ハムのパスタ」

横から訊ねるイシエリカにアネットはすらすらと答えた。

「チーズサンドが無難かなあ」

言いながらイシエリカを見ると、彼女も一瞬だけ考えて「だね」と答えた。

「今日のお昼は決定？」

開いたノートを閉じてアネットが聞いてくる。

「うん。サンドイッチと適当に菓子パンと飲み物買って図書館の庭園にでも行くわ。桜も週末の雨で散っちゃうだろうから、花見気分だね」

「いいね、俺も一緒していい？」

私の発言に笑顔のままアネットが聞いてきた。

「いいよー」

気楽に答えたのはイシエリカ。

「ラートルとヒュクトはお昼どうする？」

アネットとイシエリカがそこで話を始めたので、反対に振り返って窓際の席に声を掛けると、無造作に伸ばした黒髪に緑の瞳の少年が穏やかに微笑んで手を振ってきた。

「僕らも参加させてもらおうよ」

「・・・ん」

会話の内容は丸聞こえだったのだろう。

優しい声で答えた黒髪の少年の横で、灰色に近いプラチナブロンドの少年が軽く頷いた。

緑の瞳に黒い髪の少年はヒュクト・ディレアル・リユーン。

物腰が柔らかく、誰に対しても微笑を向けるうちのクラスの王子様  
対してプラチナプロンドに灰色の瞳。無表情がトレードマークの少  
年はラートル・チェリ。

殆ど喋らず、大抵の物事には頷くか、一言二言の言葉で済ませてし  
まう。

そして、いつも寝ている。

この二人はアネットとよく一緒にいる。

自然と、入学式の日には私が後ろの席のアネットと仲良くなり、気づけ  
ばヒュクトとラートルも仲間に加わっていたという現状。

入学して一月もせず男女の垣根無く友人が出来ているのだから、  
田舎の学校の協調性も侮る事なかれ。

協調性は大事だな。と意味もなく再確認してしまった。

「じゃあ、お昼休みはそれで決定だ」

イシエリカが締めくくったところで、チャイムが鳴った。

\*

外はピクニックに絶好な天気だった。

アカデミーの昼休みでピクニックも無いが、気分は大事だ。

私達五人はお昼休憩のチャイムと共に連れ立ってパンの購買に向か  
い、各々の買い物を済ませてそのまま図書館前の庭園にやって来た。  
庭園は中央にシンプルな作りの噴水が置かれているだけで、後は広  
範囲にわたって芝生。と言うだけの、とてもじゃないが庭園と言う  
よりもただの草原だが、それでも月に何度かは手入れされ、芝生も  
綺麗に刈られているので、皆成り行きで「庭園」と呼んでいたらす  
る。

まあ、アカデミーの中で「草原」も無いだろうとは思っが。

ちなみに、校舎からは結構な距離があるので、あまり好き好んで此

処まで来てお昼を食べる生徒は殆ど居ない。

今だって、私達のグループを除けば、広い園内に散らばっているのは三組のグループ。

それでも、温かい日差しと時々吹く春風に散る桜に満足して私達は買ってきたパンや飲み物をいそいそと広げた。

いただきます。と全員で合唱してから、今週オススメのパンに齧りついたアネトはもそもそとパンを咀嚼しつつ、いつもの独り言を始めた。

「小麦の中に玄米と胚芽を入れて焼いたパンにチエダーチーズとモツアレラチーズ、それに薄く塩漬けた胡瓜か」

そう言つてアネトはぶつぶつ呟き続け、呟く合間にパンを咀嚼していた。

いつもの事なので、もう誰もツツコミはしない。  
しないが、とても怪しい。と全員が少なからず心の中では思っている。

アネトは食べることに關して並々ならぬ関心を示すようで、初めて食べる物に対して色々と感想を呟きながら食べる癖がある。

最初の三日目ぐらいまでは皆して「変だ」と言っていたが、本人の家庭事情やら何故そんな癖がついたのか聞いてからは、とりあえず誰も何も言わなくなった。

私とイシエリカ、それにヒユクトはアネトにオススメを聞いたくせに、結局オススメのパンではなく、卵とツナのサンドイッチを買い、同じタイミングでそれに齧りついた。

ラートルは買ったパンには手を付けず、先にパツクのリンゴジュースをいつもの呆け面で味わっていた。

私を含め、パンに齧りついた四人はそれなりにおながが減っていたのか、一つ目のパンを黙々と食べ、ようやく言葉を発したのはほぼ同時に最後の一口を咀嚼し終え、各々飲み物に口をつけた後だった。

「うん。美味しかった」

「アネトの食べることに關しての、その情熱は凄いと想うんだよ」  
ふ、と一息ついたヒュクトが何かを思い出しながら笑いだした。

それは、暗に先日の調理実習を示していたので、私はその時の事を  
思い出して思わず顔がにやけてしまった。

「・・・作る方も凄いと想うわよ」

呆れ顔でぼつりと言ったのは、イシエリカ。

「だよ。どうして、普通に料理してて毒物を作り出せるのか、原  
理がさっぱり分かりません」

悪ノリした私がニヤニヤと笑って言うと、アネトがしかめっ面でそ  
っぽを向いた。

アネトの両親は王宮に勤める料理人だった。

なので、アネトも産まれたときから王都に暮らし、王様や貴族が褒  
める料理を普通に食べて育ってきたのだ。

本人の舌も言うに及ばず、かなり肥えている。

そして、食に關する知識と並々ならぬ感心は賞賛に値すると思っ  
ただ。

なのに、何故かアネトが作る料理は物凄く不味い。

いや、不味いというか、食材に土下座しろと言いたくなるぐらいに  
元の食材の原型を留めていない。と、言うか、匂いも見た目も相当  
ヤバイ。

先日の調理実習で、アネトはその特技を惜しげもなく私達に見せ付  
けてくれたのだ。

しかも、特に毒の持つ食材も使っているわけではないのに、何故か  
毒物が出来上がることがほぼ、七割。

直接食べていない、私とヒュクトとラートルには笑い話だが、不運  
(?)にもアネトと同じ班になり、入学したばかりで一日腹痛で寝  
込んでいたイシエリカには苦い思い出だろう。

まあ、毒と言っても腹痛や吐き気が大半で、実際に人死にが出てい  
ないのはまだ救いだと思う。

それでも、実際にその毒にあたったイシエリカは苦い顔をしている

のだが。

彼女いわく、あまりの痛みを意識を手放した際に「小さい頃に死んだお祖父ちゃんが笑顔で対岸で手を振っていた」らしい。臨死体験出来る料理。

かなりの苦痛を伴うが、いつそ特許でも取れと進めるべきだろうか？でも、それを言ったらアネットが拗ねて口を利いてくれなさそうなので、脳内に留めるに終わっている。

「・・・でも、本気になったら致死量の毒とか作れそうだよね」  
仄かに青ざめつつも、弄れる時には弄っておこう精神が働くのか、イシエリカが口を挟んだ。

「・・・良いんだよ。俺は作るより評価する方が好きだから」  
実習から何度もその話題で弄られているアネットが仏頂面で言う。

「俺は家事が得意な人と結婚するんだから」

甘い考えだなあ。と思い、私は喉の奥で笑った。

思わず、イシエリカの方を向くと、イシエリカも苦笑している。  
今の世の中、結婚よりも仕事に生きる女性は多い。

男だから嫁を貰って家事全般は押し付ける。なんて生活は昔に比べれば、かなり難しくなっている。

「アネット」

私はアネットの肩をポンポンと叩くと、振り向いたアネットにどうしようもない憐れみの視線を送りつつ、首を横に降った。

「な、なんだよ、ルツカ！」

言わんとする事を察しているのか、アネットが声を荒げる。

私の憐憫の情をしっかりと感じたのだろうか？

「何でも無いよ？」

「同情するなよ・・・」

「同情なんて、これっぽっちもしておりませんか？」

ふざけて右手の親指と人差し指を触れるか触れないかの位置で合わせ見せ付けるとアネットが「性格悪う・・・」と呟いた。

けれど、私はそんな台詞言われ慣れてるので、笑顔で言ってやっ

た。

「ああ、そうそう。「薬学科」に入った幼馴染にアネットの料理の事言ったら、「面白そうだから、説明させて」って言ってたよ」

「……………」

アネットの顔が、これでもか。と言っくらいに引き攣った。

後日、「薬学科」の生徒達が主体となっで行なっている「毒薬学」と言う部活から、正式にアネットにコンタクトがあったと聞いて、内情を知る私達は全員で笑い転げたのだった。

### メルツアーラ・アカデミー【3】

アカデミーに入学して二週間目の週末。

私とイシエリカとアーティアカそれに、アーティアカのルームメイ  
トであるナギの四人はアカデミー地区の端にあるオープンカフェの  
一角でのんびりと遅めの昼食を済ませていた。

「ノームウエーナの布って触り心地良いねー」

食べ終えた食器が片付けられ、テーブルには食後のお茶だけが乗っ  
ているという状態で、いそいそと買ってきたばかりの布を袋から取  
り出して、その表面を撫でながらアーティアカが嬉しそうに笑った。  
事の起こりは三日前。

帰宅時に広場までの道を歩いていたらまたまたアーティアカに会い、  
借りたままだった本を返すために寮に寄ってもらった。

その時に部屋を見たアーティアカがノームウエーナの布を使ったベ  
ッドシーツを非常に気に入ったらしく、既に帰宅していたイシエリ  
カがそれを聞いて「じゃあ、次の休みに見に行こう」と言った。

前日になって、アーティアカがルームメイトも呼びたいと言って、  
それなら朝から集合してアカデミー地区のお店を片っ端から覗いて  
みよう、という話になった。

「ルツカにしても、アーティにしても、ノームウエーナの物に違和  
感無いんだね」

食後のお茶を啜りながら、イシエリカが興味深そうにアーティアカ  
を眺めている。

「こっちの大陸では、そういう色は人気無いと思ってたんだけど」  
「そうでもないよー。フィーリは元から派手な色は避ける傾向にあ  
るから。ルツカちゃんも言ってたよ」

「いや、言ったよ。私」

「だっけ？」

すっ呆けた、と言うよりは本当に覚えていないと言った感じにイシ

エリカが小首を傾げる。

「フィーリは元々田舎だから、派手な人工色よりも自然色の方が身近なものなんだよー」

そこまでアーティアカが言って、イシエリカは「あ」と声を上げた。入寮した日の会話をやっと思い出してくれたようだ。

この話って、してから二週間しか経ってないけど？と言っと、イシエリカが、私、記憶力弱くてさー。と首を竦める。

「そう言えば、アーティに聞いたんですけど。フィーリはのんびりとした農業の街なんだそうですね」

デザートのプリンを掬いながら穏やかな声でそう言ったのは、ナギ・イリヤ。

アーティアカと同じく「薬学科」の一年生で、アーティアカのルームメイト。

灰緑の珍しい色の髪に、董色の瞳。

静かで優雅な物腰で、ともすれば夕暮れ時の音楽室でピアノでも弾いていそうな儂げな彼女は工芸の街、ケルムナの出身だった。

ケルムナ、と初めて聞いたとき、私とイシエリカは咄嗟に工房で熱に当てられながらも作品作りをする屈強な男達を想像してしまった。飛び散る汗、怒号、灼熱の工房。

つまり、ケルムナと言う街は簡単に言えば、そういう熱い街なのだ。工房だけが熱いわけではない。

街全体が熱いのだ。

それが、アーティアカに紹介してもらったナギは風が吹けば飛んで行きそうなくらいに細く華奢な外見におっとりしたお嬢様系の顔立ちで（しかも、期待を裏切らずに可愛い）、ケルムナの出身と言うよりも音楽の街テトレの出身と言われた方が納得しそうだった。

ちなみに、ナギは見た目に反せず喋り方も上品でおしとやか。

「そう。農業以外は何にもない、本当にのんびりした穏やかな街だよー」

「基本的に暮らしてる人が皆、のんびりだよー。だから、時々王

都の人がそんな暮らしに憧れて引っ越してくるの」

「その典型が我が家」

フィーリと言う街は、はっきり言って他の街に誇れることが殆ど無い。殆ど、・・・と言うかまったく無いに等しい。

特徴と言われれば「のんびりしてます」としか形容できない街。

人々はお米や麦を主農業とし、それ以外に季節の野菜や果物を作りながら毎日を過ごしている。子供達はそんな家の手伝いをしたり、時々河に泳ぎに行つて魚を取ったり、山に登つて山の恩恵に預かつてたり。

農業が誇れるかと言うと、大陸には農業で有名な街がフィーリの他に多数存在するので、それも特には無い。

ちなみに特に特産品もない。

フィーリと言う土地は、だからこそ切磋琢磨せずにのんびり、まったりと暮らせるのだ。

都会独特の隣の人とさえ争うような、あがきすぎず感も無く、住人は余所者にも優しい。

ので、時々、疲れた人がふらつと現れてはそのまま住んでしまったりするのだ。

私の母も私を身籠つた際に王都で色々あり、ストレスを溜め過ぎた為に私を流産しかけたという経緯で、休養の為にフィーリを訪れてから気に入つてそのまま住んでしまったと言うオチ。

元から子供が産まれたら引退しようと考えていた母はそのままフィーリに引越し、時間があればお隣の農作業を手伝い、それ以外では子供達に歌を教えている。

父も父で甚くフィーリが気に入つたのか、王宮からの呼び出しがからない場合は殆どフィーリに居て作曲の仕事をしている。

「アーティアカの家は古くからある、由緒正しい葡萄園だったよね？」

私が言うと、アーティアカは「葡萄園に由緒つてあるのー？」と暢気に聞いてきた。

「あるでしょ。葡萄だつて、物に寄れば凄い価値があるし、アーテイの家つてワインも作つてたじゃない」

父はアーティアカの家がワインがお気に入り、私がアーティアカの家遊びに行つてワインを貰つて帰つてくる度に嬉しさで小踊りしていた程だ。

「ワインかあ。美味しいよね」

ワインと言う単語に、うつとりとするイシエリカ。

残念ながらお酒の類は好まない私には、その感覚は良く分からない。

「イシエリカちゃんはワイン好きなの？」

「うん。小さい時から飲んでるからね」

「そうかー。今度家のワイン持つて来てあげるね」

「本当？楽しみにしてるね！」

アーティアカの台詞に、イシエリカ心底嬉しそうに食いついた。

「アカデミーにも寮にも、ばれないようにしないといけないですね」

それまで黙つて会話を聞いていたナギが、うふふと上品に笑う。

「大丈夫よ。いざとなつたら「お国柄」で通すから」

得意気に言い切るイシエリカに私は「また、それか」と溜息をついた。

「こういう時にノームウエーナの内情が大陸に漏れてなくて良かったと思うのよね」

「でも、先生方の中には少しは居るんじゃないの？」

浮かれて喋るイシエリカにナギがもつともな質問をした。

「んー。今のトコ、普通科には居ないね。ノームウエーナの人つてあんまし大陸には渡らないし、逆にノームウエーナに来る大陸人つても殆ど居ないから」

「普通科の一年の中でも、今年はイシエリカだけだし、後は最初のホームルームで先生が五年前に卒業した先輩以来だつて言つてたからね」

本当に少ないよね、と私は続けた。

「うん。でも、アカデミー内探せば、生徒とか先生の中に何人かは

いるんだと思うけどね」

対して興味なさそうに言っつて、イシエリカはカップに残った紅茶を飲み干した。

「ノームウエーナかあ」

そう呟いた時。

ふいに強い風が吹いて、隣の席の女性の帽子を攫っていった。

「あっ」

慌てて女性が席を立ち上がると、気づいたウエイターが帽子を捕まえた。

ウエイターの元に駆け寄って御礼を言いながら帽子を受け取る女性を横目に、乱れた髪を直しながらイシエリカがふいに上を向いた。

「何か飛んでる？」

訊ねると、イシエリカはこちらを見ないままに答えた。

「・・・うつん。違う」

ずっと上を向いたまま答えるイシエリカの視線を追っても、そこには空と雲があるだけ。

「何か、見えました？」

穏やかな声音でナギが聞いて、そこで初めてイシエリカは上を向くのを止めた。

「一瞬、何か見えたかな、と思ったけど見間違いみたい。きっと、風で飛ばされたゴミか何かね」

言っつて、何事も無かったようにイシエリカは微笑んだ。

\*

## 【少女】

少女が一人居た。

薄暗闇の中、少女は一糸纏わぬ姿で石畳に這い蹲っていた。苦しげな呼吸と、呻き声。

白い背中が呼吸に合わせて震えながら上下に動き、肩甲骨を伝う汗が腰へと流れ落ちる。

長い鮮やかな翡翠色の髪が首筋や背中に張り付き、残りは無残にも冷たい石の上に広がっていた。

「苦しいか」

ふいに少女の上に音も無く影が重なり、その影が低い無機質な声で問うた。

少女は軋む身体に鞭打って、どうにか影の方を見上げる。

何か言おうと思っても乾ききった口内では舌が張り付いて上手く声が出せず、手を伸ばして影を掴もうにも、麻痺した腕が伸ばせない。

「右足が落ちたか」

視線を少女の右足で止めた影が言った。

太ももから先、その先が不自然に消失している少女の右足。

少女は猫のように縦の瞳孔が走る金の瞳で影を睨み付ける。

まるで、それだけが唯一の抵抗だと言うように。

けれど、影は少女のそんな視線を受けても、一切怯む様子は見せない。

「お前に与えられた時間は僅かだ」

影の無機質な声。

それを最後の台詞とし、影は現れた時と同じように音も無く消えた。薄闇の中に再び残されたのは少女のみ。

それでも、少女は影の佇んでいた方を睨みながら、呟いた。

「・・・許さない」

それは、掠れて不明瞭な言葉だったが、それでも強い憎しみの込められた怨嗟の言葉。

\*

その日、アカデミーは朝から落ち着かなかった。

季節外れの台風が訪れていると言う事で、大事を取って暫く休校にするべきか否かと教師陣が話しているらしい。

職員室から帰って来たヒュクトが先生から預かった自習のプリントを配り終え、その足でそのまま私達の席まで来てそう言った。

「台風って、そんなにヤバイもんなの？」

ノームウエーナの土地柄、台風に縁が無いのだと言うイシエリカが不思議そうに呟く。

「うん。元々、王都は災害に備えてそれなりの対策はしてるんだけど、今度の台風はそれでもどうなるか分からないって。だから、魔術科や詠唱科、それと召喚科の先生達が王城に応援に行く話も出てみたいだよ。先生たちも居なくなるし、いつそ休校にしようって話が出てみたいだね」

ふうん、とイシエリカが相槌を打つ。

「でも、王都にはお抱えの術者が何人かいて、その人たちが、こういう災害の時には王都全体に結界を張るって聞いたような気が・・・」

「私が過去に父から聞いた話を思い出すと、ヒュクトは「うん」と頷いた。

「そうなんだ。王都って人工的に作られてる物だから台風とか地震

とかの自然災害に滅法弱くて、それを補う為に王城には常に複数の術者が常駐してるんだ。それが、今回はその人たちの力だけでは足りないって事で先生達や先輩達にもお声がかかってるらしい。今はアカデミー地区やその近くにいる術者を出来る限り呼び集めるように動いてるらしいよ」

「でも、今じゃ術者ってそんなにいないんでしょ？」

この世界は魔力や呪術と言ったものがまったく無いわけではない。ただ、圧倒的に少ない。

実際に魔法を使う術者や、それを補助する詠唱師、それに異界から色々なものを呼び寄せる召喚師なんて言う人たちも実際にはいる。いるが、それは普通に生活してれば、まず出会うことは限りなく0に近い人たち。

さすがに王都ともなれば、先ほど言った通りに王城に駐在する数人を含め、そこそこの人数はいるのだろう。

アカデミーの専門学科内にも科は存在するし、先生も生徒も居ることとは知っていた。

けれど、私達が彼らに会うことは無いだろう。

今の世の中、術者と言うのは絶滅寸前なのだ。

「確か・・・アカデミーの先生、生徒を合わせて二十人くらいだったよ」

でも、新入生引いたら十二人くらい？とヒュクトは言った。

「・・・アカデミーの全体数から見たら圧倒的に少ないでしょ。それ」

「うん。再来年たりには学科も統合されて、一つになるか、他の少しでも係わりのある学科に吸収されるだろうって聞いた」

うわー。本当に絶滅の危機だ。

絶滅危惧種とかのレベルは既に超えてる気がする。

「王城にいる人たちも、もうかなり力も弱くなってるみたいだしね。今回はアカデミーや近隣の補助で乗り切れればいんだけど」

ふう、と溜息をついてヒュクトが窓の外を見た。

窓の外はまだ午前中だというのに既に薄暗く、空を厚い灰色の雲が覆っていた。

風も相当強いようで木々が激しくざわめきたっている。

唯一の救いは、まだ雨が降っていない事ぐらいだけれど、それも時間の問題だった。

「術者かあ。うーん、生まれてから一度も見たこと無いな」

暫く三人で静かに窓の外を眺めていたら、ふいにイシエリカが言った。

「そうだね。まあ、あの人達も「自分は術者です」とは言いふらしてないからねえ」

私も見た事は無い。

昔はそれなりに居たと古い文献で読んだ事があるが、それも千年前の話。

千年前、この世界は二つに別れたと伝えられている。

その時、大半のそういう力も失われたのだと聞いた。

「死ぬまでに一度は【魔法】って奴にお目にかかってみたいもんだわ」

「召喚とかね。でも、私達が大人になる頃にはそれこそ、完璧に物語の中の話かもね」

既に心は帰宅の徒にあるとばかりに自習のプリントにも目もくれずに、あははー、と暢気に笑いあう私とイシエリカ。

と、話の乗ってくると思っていたヒュクトが黙ったまま、女子が羨むほど大きいその瞳を更に大きくして、不思議そうな顔をしていた。

「美少年はどんな顔にしても絵になるねー」

イシエリカもそんなヒュクトの様子に気づいて笑う。

けれど、ヒュクトは合点がいかない。とばかりに眉間に皺を寄せて小首を傾げた。

「あれ？」

「何？どうしたの、ヒュクト」

訊ねるとヒュクトは「んー？」と少し考えてから、ゆっくりと私の

背後を指差した。  
振り返るとそこには机に突っ伏して気持ち良さそうに眠るアネトの姿。

会話にも入らずに静かだと思っていたら、授業開始早々に眠りに就いていたらしい。

赤毛の合間に見えるつむじが何だか可愛いらしい。

そんな事を考えていたら、背後からイシエリカの声が聞こえた。

「アネトがどうかした？」

「・・・二人とも、知らない？アネト、召喚出来るんだよ？」

さらに、と何でも無い事のようにヒュクトは言う。

「・・・え？」

召喚？

一瞬、私の脳内に「召喚って何だっけ？」と言葉が浮かんだ。

けれど、その言葉を紡ぐ前に、同じように思ったのか、イシエリカが口を開いた。

「召喚って、あの、異界リンカーネルから召喚獣を呼べる召喚？」

こくり、とヒュクトは頷く。

ちなみに、異界リンカーネルと言うのは千年前に別れた二つの世界の、こちら側では無い方の世界の名称。

「そう、その召喚。さっきまで話してたじゃん。あれ？もしかして、本当に知らなかった？」

し、知らないよ。と、イシエリカとほぼ同時に首を横に降る。

「ちゃんと、王都で取得してる資格も持つてるし、僕、実際にアネトが呼んだドラゴン、大きさは猫ぐらいだけど、・・・ミニドラゴンって言うのかな？見せて貰った事あるよ」

ミニミニドラゴン？

私とイシエリカは思わず顔を見合わせた。

「ド、ドラゴンってあの、リンカーネルにしか存在しないって言う？」

「今ではミニドラゴンですら呼べる人は王都にも殆ど存在してない

って言う、あの、ドラゴン？」

そうそう、それ、とヒュクトは笑顔で合いの手を入れる。

私達は目を見開いてお互いを見て、それから同時にアネットを見た。そして、最後にヒュクトを見てもう一度訊ねた。

「「召喚師？」」

綺麗にハモった。

「うん」

やっと理解した私達にヒュクトは笑顔のままであっさりと言った。

「「……え？ええええーっ！！！！？」」

次の瞬間、教室の中に私達の声が大きく響き渡ったのだった。

## メルツアーラ・アカデミー【4】

かつて、この世界は二つの世界が絶妙なバランスで重なりあって成り立っていたのだと言う。

人が住む世界、イストリアス。

竜が暮らす世界、リンカーネル。

その二つが、重なりあって成り立っていた。

この二つの世界が完全に分離したのは千年前。

時の皇帝・カルネレイア二十一世の第四皇女だったメルペシエカ・カルネレイア。

彼女が竜王・ルイルスに嫁いだことがそもそもの始まりだったという。

メルペシエカと竜王の婚姻は、より一層人と竜の絆を深くする為と取り成されたもので、今で言う政略結婚の類だった。

けれど、メルペシエカは心から竜王を愛した。

竜王もまた、メルペシエカを愛した。

そのまま、二人が仲睦まじく暮らしていければ、きっと世界は二つに分かれてしまう事は無かったと思う。

でも、悲劇はいつも予測しない方向からやってくるものだ。

当時、カルネレイア二十一世に使える聖騎士の一人に、マリウス・ケインと言う男がいた。

彼はメルペシエカ皇女に恋焦がれ、竜王との中を引き裂こうと画策した。

そして、調停の使者と身分を偽って竜王に近づき、聖剣で竜王を殺してしまった。

不老と、永い時を生きる竜族を殺す為だけにイストリアスに存在し

た聖剣。

その封印を解いて、己が身に呪いを受けてまでも皇女を手に入れようとした男。

けれど、皇女は竜王を殺したマリウスを激しく憎んだ。

彼女は死した竜王の血肉を喰らい、その身を不浄の竜へと変え、怒りのままにマリウスを食い殺した。

そして、彼女は人の愚かさに嘆き、その力を持って二つの世界を完全に切り離した。

それまで、調和し重なっていた世界は分かれ、手を伸ばせば届いていた世界は二度と容易く触れることは出来なくなつた。

触れるものには犠牲か戒めを。

それは人が竜に触れることも、竜が人に触れることも困難にした。

世界を分けた後、メルペシエカはその強大な力を持ってして、不浄の竜でありながら竜の頂点に立ち、今もリンカーネルを治めているという。

これは、イストリアスに暮らすものであれば誰もが知っている物語。千年前の出来事は既に伝説とされているが、リンカーネルの事は真実で、私達はいつでもすぐ近くにリンカーネルの存在を感じているのだ。

それは、千年を生きる女王の物語。

\*

「・・・ああ？言い忘れてたかも」

欠伸をしながら、暢気な口調でアネットは言った。

まるで何でもない事のように、世間話でもするような口調で。勿論、私とイシエル力は憤慨した。

「忘れてたかもって、酷いんじゃない？」

「そうだよ。アネトが召喚師ってもっと早く知りたかったよ」

「・・・何で？」

イシエリカが鼻息も荒く言い切ると、アネトは微妙な顔をした。

「そりゃあ、ドラゴンとか見たいし」

じゃあ、別にいつでもいいじゃんかー。とアネトは迷惑そうに呟く。

「第一、俺は昔から日常生活で召喚ってやってたから、今更自分で言いふらそうとは思わないだよ」

昔から日常生活で？

どんな場面で召喚術なんて使うのか、私は不思議に思った。

「王都以外ではどうなのか知らないけど、王都では頻繁に竜ってのは召喚されてるんだよ。まあ、普通に考えてミニドラゴン限定だけど。王都は自然災害に滅法弱いから、場合に寄ってドラゴンの力も借りる。勿論、借りればそれに見合った礼をするけど」

私の顔を見て何か感じ取ったのか、アネトが説明してくれる。

「術師は年齢じゃなくて能力値で召集かかるから」

だから、アネトも幼少の折から呼ばれることが多く、また、そういう者はいざという時に力が使えなくては困るので、日常生活で慣らしておくらしい。

・・・ん？

と、言うことは。

「ねえ、アネト。今でも日常で召喚してるの？」

「してるよー」

この答えにイシエリカが勢い良く食いついた。

「え？え？じゃあ、今呼んだらミニドラゴンとか見れる？」

両目を大きく瞬いて、イシエリカがアネトに詰め寄る。

「よ、呼べるけど・・・ちょ、ちょっとイシエリカさん、怖いんですけど・・・」

にじにじとイシエリカに詰め寄られて、アネトが狼狽していた。

「だってさ、人生で一度ぐらいは見ておきたいじゃん。ドラゴンとか」

「・・・ドラゴンとかって何さ」

「ドラゴンとか、ドラゴンとか、ドラゴンとか？」

「ドラゴン以外の何かが分からないんだね、イシエリカ」

タイミング良くツツコミを入れたヒュクトにイシエリカはへへっ  
と笑みを返す

「いや、ノームウエーナにはドラゴン以外の伝承ってなくてさ。こ  
つちきてからドラゴン以外の生き物もリンカーネルには存在するっ  
て知ったのよね。でも基本的に私、ドラゴン以外はどうでも良くて」

「でも、名前だけでも耳にしたこと無い？」

「あるけど、ドラゴンすら見れないのに、他の生き物に思いを馳せ  
てもしょうがないじゃない？だから、ドラゴンしか眼中に無いの」  
まあ、その気持ちは分からなくもない。

リンカーネルには竜以外も暮らすと聞くけれど、今の世の中、その  
竜でさえ中々お目にかかれないのだ。

竜以外の生物を異界から呼び寄せられる術者なんて、今では稀少中  
の稀少。

「まあ、言われればそうだけだね。俺もドラゴン以外は呼んだこと  
ない。ってか試したけど無理だったし」

マクルトケアでしょー、ミクトナでしょー、ラーベンティでしょー、  
とアネトは聞いた事も無い単語を並べて行く。

「アネトはいつも竜意外の稀少な生物を呼ぼうとして失敗するんだ。  
それこそ、文献にも名前が残っていないような生物をね」

ヒュクトが苦笑しながら解釈してくれたので、私達はアネトの口か  
ら出る単語が生物の名前だと認識する。

「どうせ呼ぶならさ、誰も呼んだことの無いもの呼びたいじゃん  
？」

「でも、ドラゴンが呼べるだけで凄いいもんでしょ」

「うん。普通は呼びたくたって呼べないし」

「アネトって、実は凄かったんだね」

「ね、実はね」

イシエリカと二人で、「実は」「実は」と繰り返してからかっていたら、いつの間にかアネトが拗ねてそっぽを向いていた。

やっぱり、召喚が出来ても、中身はそこらの男の子と変わらない。

私の中にあつた術者のイメージはアネトのおかげで軽く払拭されていた。

術者って言うのは、もっと堅物で偉そうなイメージがあつたのだ。

それとも、アネトはあくまでも私達の同級生だから、そっちのイメージで定着しているだけなのか。

何にせよ、召喚師何ていう稀少な存在がすぐ近くに居たのだ。

これは、見れるもんは色々と見ておくべきだろうと、私は思った。

\*

台風は三日間も王都に居座つた。

その間、学校は休校になつた。

でも、折角のお休みも台風のせいで出かけることなんて出来なかつたので、殆ど寮の中で過ごす羽目になつたのだつた。

最初はイシエリカと二人で他愛もない話をしたり、読書をしたり、カードゲームに興じたり。

けれど、二人と言うのは存外に飽きるが早い。

そうなると自然とホールに誰か居ないかとふらり、と出て行って、大概皆も思うことは同じなのか、ホールでカードゲーム大会など開催されていて、私とイシエリカは嬉々として参加した。

アネトにドラゴンを見せてくれるように頼んだのだが、結局、晴れて落ち着いたらと言うことで先延ばしにされてしまった。

台風のせいで、ドラゴンも機嫌が悪いらしい、とアネトは言った。

イシエリカは物凄く残念そうな顔をしたけれど、「機嫌の悪いドラゴンは何をしでかすか分からない」と言うアネットに折れて渋々諦めていた。

けれど、それぞれが互いの寮への道へ入りかけた時、イシエリカはアネットに

「約束破ったら、針一本丸のみね」

と、笑顔で言い、アネットは引き攣った顔で応じていた。

どうやら、彼女は本当にドラゴンが見たいらしい。

まあ、私も見たいかと聞かれれば物凄く興味があるので、やっぱり約束はしただらうけど。

「異常気象よね」

手元にあるカードを眺めながら次の一手を考えていた私の耳に、不安げな声が聞こえた。

顔を上げれば、同級生のリチアが暴風の叩きつける窓ガラスを見つめて顔を顰めていた。

リチアの声に反応したのは私だけではなかったようで、同じように数人の級友達が同時に窓を見つめる。

「三十年前にも一度あったんでしょ？」

「台風？」

「そう、何でも一週間も続いて、王都がほぼ壊滅状態だったんだって」

「結界や魔術師達は？」

「持たなかったって聞いたわ。何でも、その台風は自然のものではなくて、人為的に作られて王都を襲ったんですって。だから防ぎようがなくて、ノーテンバークが氾濫した川の水で寮ごと押し流されて結構な数の生徒が流されて亡くなったって」

皆の不安を煽るように語ったのはラフェンティ。

歴史が得意で、あんた何で専門学科に進まなかったの？と訊ねたくなるくらいに王都の歴史に詳しい子だ。

「今建ってるノーテンバークは二度と水害にあわないようになって重

ねの補強をして作られたらしいわ」

「でも、あの寮はミットル川に近いから、今頃寮生は不安でしょうね」

「そうよね、いくら補強されても、絶対なんて無いんだから」

その言葉に、級友達が口々に「そうね」とか「心配だわ」とか自分の意見を言い始めた。

・・・さすがに二十五回戦目にもなると、満場一致で「飽きた」と思っらしい。

隣の子が無造作にカードをテーブルの上に放るのを見て、私もそれに習った。

朝からずっと動いていないので、さり気なく座りっぱなしの腰が痛い。

私は隣で喋っている子に「抜けるね」と声を掛けて、輪から抜け出した。

ホールから一歩でも出ると、皆の声は聞こえなくなった。

窓に叩きつける雨風の音だけが耳に響く。

私は階段を上がって真っ直ぐに部屋に戻った。

イシエリカのない一人きりの部屋で、そのままベッドに突っ伏して目を閉じる。

体中の力が沈んでいく感覚に、私は自分が酷く疲労していたことを知る。

アカデミーに来て慣れたとは思っていたけれど、それでもやはり、人がたくさんいる場所は苦手だった。

それも、同い年の子供が数十人単位で集まる場所は特に。

大人とは違う、純然たる好奇心の目が時々、私をかすめて行く感じ。今はもう、口にする人は少ないけれど、それでも中には時々いるのだ。

父や母を尊敬する類の人間が。

アカデミーに入学して、名前が知れたとき、私は逃げて逃げて逃げまくった。

フイリでは私の音痴は有名でも、アカデミーでは違う。  
生徒や、時に先生に、

『歌って』

と言われて酷く狼狽した。

アカデミーでは普通に暮らそうと思っていた気持ちが微かにざわめいた。

どうして、ここでも私はそんな事を望まれるの？

・・・私が歌えば、勝手に失望するくせに。

そんな気持ちだ。

沈めていた感情が、静かに頭を上げた気がした。

『アカデミーに来て、ルツカちゃんは変わったね』

入学して、暫く経った頃、アーティアカが言った。

私は、そうかな？と平然としたふりをして答えた。

当たり前だった。

波風立てずに、平穩に私は暮らしていたのだ。

私が誰の子かなんて気にしないでほしい。

私は私で、それ以外のなんでもないのだ。

私は自分の出来る事を探す為にアカデミーに来たのだ。

なのに、アカデミーに来てまで好奇の目で見られて、勝手に人生を決められるなんて冗談じゃない。

出来れば両親の事も知られたくはなかった。

でも、それは無理だと知っていたから、少しばかりの譲歩はしようと思った。

本来の、自分でも冷めてるな、と思う部分は表に出さないようにし

た。

本当はカードゲームに興じるよりも、一人で部屋に居たかった。雨の日は静かに本でも読んでいたい。

誰かに気を使うのも、気を使われるのも、正直しんどい。

両親のように、富も名声も欲しいとは思わない。

ただ、自分ができる事やって、それなりの生活が出来て、いつか結婚して、死ぬ時は可愛い孫に看取られて眠るように死にたいだけだ。

好きな言葉は「平穩」

そう、私はそんな静かな生活に、ただ純粹に憧れていたのだ。

## ムルキベルの牢獄【1】

『彼は嘆くことすら知らなかった。』

\*

・・・わたしが何をしたと言うのだろう

わたしは、好きで産まれたわけではない

産まれる事を望まず、また、誰にも望まれず

自身の存在にいかなる時も違和感すら感じず

全てのものに否定され

そして、消される運命

「・・・それが、義姉上のお考えならば、わたしは従うのみです」

これでいい、と思った

もとより、わたしの居場所はイストリアスにもリンカーネルにもありはしない

ならば、時の牢獄と呼ばれるムルキベルになら、わたしの居場所はあるのかもしれない

だから、義姉上の仰る事は正しい事だ

わたしは、酷く疲れていた

だから、終わりに出来るのならば、終わりにしたかった

紡がれる呪文に、ゆっくりと目を閉じた

暗闇の中ならば、誰もわたしを見つけれない  
傷つけられる事も、罵られる事も無い  
ゆっくりと眠っていられる

これで良い

思ってたときには、既に暗闇の中だった

\*

「ルネ！」

メリルは朝靄の中で友人の名を叫んだ。

台風が去ったばかりのアカデミー。

久々に学校が再開されるといので、メリルと友人のルネは朝早くから寮の裏手にある土手に薬草を摘みに来たのだ。

前回摘んだ分は既に萎れてしまつて、使い物にならない。

それに、雨上がりの後の草木は瑞々しくて普通の日に摘む薬草よりも強い効果が期待できる時がある。

そう思つた生徒はメリル達の他にも居たのだろう。

土手に向かう途中で幾人かの級友と挨拶を交わした。

「入り口の方は、ドルトもディーパも摘まれてて、もう殆ど無いよ」  
親切な級友がそう言つて、穴場だという場所を教えてくれた。

そこは土手の入り口から少し奥まったところにあっただけ、時間に余裕はあつたし、アカデミー地区の一角は結界に覆われているので魔物や獣が出る事も無い。

どうせなら良い薬草が摘みたいね。と二人は穴場へと進んだのだ。

「ちよつと、あの影も見てくるね」

暫く開けた場所で数種類の薬草を摘んでいたメリルにルネがそう言つて駆け出していったのが、十分前。

ルネが向かった先には何本もの大樹が堂々と立っていた。

陽の差さない木陰に生える薬草もある。

後で自分も行こうとメリルは思つて、ルネの背中を見送つた。

けれど、ルネの居る筈の大樹の影に行つてもルネの姿は見えなかつた。

「この歳になつて、かくれんぼ？」

最初は、ただ、純粹にルネが自分をからかおうとしているのだと思つた。

大人びたルネだが、時々、異様に子供っぽい事をする時があつた。

だから、今度も何処からかいきなり飛び出してきて驚かすつもりなのだろう。

「ルネー！驚かすつもりなんですよ？でも、駄目よ。ルネの考えならお見通しよー」

メリルの声が静かな場所に木霊する。

けれど、ルネの声も、気配も感じない。

「もう、しつこいわね。出てこないなら、置いていくわよ！」

怒鳴つても、ルネは姿を現さない。

「ルネー！！怒るわよ！」

言いながら、メリルは人の隠れられそうな場所を覗いて廻つた。

わざと大きい足音を立てて、怒っていることを表しながら。

それでも、ルネからの返事はなかつた。

「・・・っ、あんにやる」

ここまで呼んでも探しても、返事は無いし、見つからない。

「先に帰ったわね！」

まさか、とは思うが、考えられるのはそれぐらいだ。置いていくつもりが、自分が置いてきぼりにされた。

きつと、探している間にどこかですれ違ったのか、わざと怖がらせるために置いていかれたか。

「まったく、見つけたら承知しないんだから！」

見つけたら、否応なく昼食を奢らせてやる！

そう決めてかかって、荒々しく手に持った籠を振りながら、メリルは元来た道を戻り始めた。

「まったく、こつちが探してるのに、先に帰るなんて酷いじゃない！しかも、こんな人気のない所で！」

大声で文句でも言わなければ、腹の虫が治まらない。

それに、はつきり言って、無音の場所で、一人きりだと意識するのが怖い。

「ルネの馬鹿っ！薄情者！」

思いつく限りの悪口を怒鳴りながら、メリルは大樹を避けて開けた場所を目指した。

——だから、その微かな音に気づいたのはある意味、奇跡と言えた事。

かさり。

自分の怒鳴り声の合間に、微かな音が聞こえた。

「な、何？ルネ？そこに居るの？」

音のした方向は、最初にルネを探しに寄った大樹の影だった。

「驚かさないでよ、ルネ？そんなところに隠れても無駄よ！」

音のした方向を瞬きもせずに見つめて、メリルは怒鳴った。

もう！昼食奢らせて、ついでに一発殴ってやるんだから！

心の中で捲くし立てて、茂る草木を避け、大樹の影に飛び込む。

「ルネ！見つけ・・・た？」

飛び込んだ先に、確かにルネはいた。

今朝、待ち合わせした時に見た、紺色の上着。

ルネは肌が白いから、赤の方が似合うのに。とメリルが言ったにも関わらず、落ち着いた色が好きだから、と紺色の上着を買っていた。でも、ルネに紺色でも意外に似合っていて、赤でなくても良かったかも、と今朝も思った。

「・・・ルネ？」

そのルネが、草むらに横たわっていた。

体の右側が、こちらに見えている。

でも、生い茂る草に隠れて、左側と、左を向いた顔が見えない。

「ちょ、ちよっと、こんなトコで眠ってるの？駄目だよー、朝早かったからって、こんなトコで眠るなんて、風邪ひくよ？」

そう、声を掛けながら、ゆっくりとルネに近づく。

「ほらー、ルネってば・・・」

おかしい。

ルネは、いくら眠いからって、こんなトコで眠る子じゃない。

それに、私がこれだけ声を掛けても起きないなんて事ない。

それに、どうして、眠っているだけなら、寝息が聞こえないの？  
どうして、こんなに静かなの？

どうして、こんなに、生きている気配がしないの？

「・・・ルネ？」

静寂だけが、辺りに満ちる。

「悪ふざけ？私が近づいたら驚かすの？」

ねえ！答えてよ！

「ルネ！こんなトコで止めてよ！！」

本当に怖いんだよっ！！

けれど、横たわる身体は何も答ええない。

ゆっくり、ゆっくり、慎重にメリルはその身体に近寄った。そっと、身体の横に両膝をついて、持っていた籠を地面に置く。ほら、此处で、驚いた！って起きるんだよ。

けれど、それだけ近くによっても、ルネの身体はびくりとも動かなかった。

「ねえ、ルネ！私怒ってないからさ！もう帰ろうよ！」

声は怒気を含んだままだったが、勢いをつけて、メリルはルネの身体を揺すった。

「眠いなら、ちゃんと暖かい部屋で眠らなきゃ！ほら、帰るよ！」

ごろん、と揺すった反動でルネの頭がこちらを向いた。

「ひっ！？」

小さな悲鳴が、喉から上がった。

こちらを向いた、ルネの顔。

両の目が見開かれ、口元からは一筋の血の跡。

な、何これっ！？

光を映さない、その瞳を見て、メリルは愕然とした。

よろめく両足に力を入れて、立ち上がるうとする。

けれど、無様にその場に崩れ落ちる。

「・・・だ、だれかつ・・・！」

誰でもいい。

誰でもいいから、この場に来て！！

悲鳴を上げようにも、喉の奥がカラカラで声が出ない。

助けて！

お願い！誰か助けて！！

悲痛な叫びと、吐き気を堪えて。

メリルは縛れる足で懸命に駆け出した。

\*

久しぶりに人の集まった教室は、なんだか異様なくらいにざわざわしていて落ち着かなかった。

何かを知っているらしい子達は数人で一箇所に集まって小声で会話している。

小声とは言っても狭い部屋の中なので、それなりに言葉は聞こえてくるのだが、どうにも要領を得ないと言うか・・・

「何かあったの？」

こういう時はクラス委員のヒュクトが情報通のアネットに聞くに限るけれど、いつもなら、聞く前に答えてくれるアネットが、今日は休みで不在。

私はヒュクトの席に近づいて訊ねた。

ヒュクトは私の声に顔を上げて、少し困ったような顔で逡巡した後、躊躇いがちに口を開いた。

「実は・・・今朝、生徒が死んだんだ。薬学科の三年生が、寮の裏手にある土手で死んでいたんだって。アカデミー側は事故死だって言ってるけど、噂では誰かに殺されたんじゃないかって」

アカデミーで生徒が殺された？

その事実の意味が身体に染み入るまでに少しかかった。

そりゃあ、アカデミーだって大勢の人の暮らす場所だ。

何処で誰が死んでもおかしくはない。

変な意味では無いけれど、それこそ不慮の事故で命を落とす生徒や、病気で死ぬ人もいるのだ。

けれど、やはりアカデミーと言う土地柄、規律はあるし、生徒は守られている。

なのに、人が死んだ。

それも、殺されて。

「・・・殺した犯人は？」

私は自分でも驚くくらいの低い声で訊ねていた。

ヒュクトが知るはずもないのに。

また、聞いた所で何がどうなるわけでもないのに。

「まだ、見つかってない。でも、アカデミーは事故死として見ているから、犯人探しはしないだろうね」

長く黒く艶やかな睫毛に縁取られた翡翠の瞳に伏せられ、影が差し込んだ。

「・・・あまり、無意味に怖がらない方がいい」

ふいに、寝ていると思ったラートルが真っ直ぐに私を見て言った。

「怖いわけじゃないよ。気味が悪いだけ」

私は少し躊躇ってから、そう答えた。

「あと、死んだのは薬学科の生徒でしょ？アーティも薬学科だから心配なだけ」

これは心から思った事。

結局、この事件はホームルームで先生が事故死とはっきり宣言し、真実は有耶無耶になった。

三年生の死は不慮の事故、と言うことで話は完全に終わったのだ。けれど。

薬学科の三年生、ルネ・オリウスの死の一週間後、今度は医療科の二年生、ディア・リーリルが自室で死んでいるのを発見され、ルネの死は再び取りざたされる事となる。

アカデミーは一気にざわめきたった。

しかも、ディアの事件は発見時に数人の生徒がその死体を見てしまった事により教師が規制する暇も無く、あっという間に騒ぎが広がってしまった。

そして、騒ぎと同時に不可解な事実も広まったのだ。

ベッドの上で物言わぬ亡骸となったディアの左腕は肘から先が引きちぎられたようにもがれ、部屋から消失していたと言う。

## ムルキベルの牢獄【2】

アカデミーは混乱していた。  
無理も無い話だ。

短期間で二人の生徒が殺され、犯人は見つからず終い。次は誰が狙われるのか、それともこれで殺人は終わりなのか？

それらの謎がまったく解けずに日々が過ぎるだけなのだ。  
手がかりすら何もない。

アカデミー側も上手く立ち回れず、生徒の不安は募るだけ募って解消されず、中にはアカデミーを去る生徒まで出始めた。

二人目の被害者が出て五日。

嗜好きの生徒は「そろそろ次の犠牲者が出るかもしれない」と無意味に周りを煽り立てたりもしている。

「でもさ、殺された生徒二人のの関連性も見つかって無いんでしよう？」

特に興味なさそうな感じにそれだけ言って、イシエリカが手元の本のページを捲った。

それは、淡い色彩の絵が描かれた童話集だった。

イシエリカは文字を読むでもなく、ページを捲り、中に描かれた絵を眺め続けている。

「関連性も理由も分からないのに脅えられるって、ある意味凄いかもね」

ばらばらっと絵の無い頁を飛ばす音が聞こえた。

「・・・関連性、って言えるかどうか謎だけど、殺された二人は体の一部を持っていかれていまだに発見されていないらしいよ」

手元のノートを眺めてアネトが呟く。

そう、二人目の被害者、ディア・リーリスの左腕が無い死体が発見された後、アカデミー側はこの事態を隠しておけないと思ったのか、はたまた事実を隠蔽した事で後々何らかの弊害を招くことを恐れた

のか、急遽、実は一人目の被害者、ルネ・オリウスも左足が消失していると言う事実を発表したのだ。

「左腕と左足か、・・・そっだけ持っていくって事は何らかの理由があるんだろけど」

「パーツとして考えるなら、後は右腕、右足、胴体、頭？」

悩むアネトの横でヒユクトが怖いことをさらっと言った。

それは、今の状況であれば誰でも至る考えだからこそ、逆に空恐ろしく、誰も容易には口を挟めなかった。

「じゃあ、最低でも後、四人は死ぬのかしらね？」

沈黙の中、本を閉じたイシエリカが床を見ながら思いついたように言った。

「あー、イシエリカ、今の発言はちょっと・・・」

不自然な静寂に周囲に視線を向けると、教室に居た数人の同級生の剣呑な視線とぶつかり、私は微かに首を竦めてイシエリカに声をかけた。

「ああ、ごめん、ごめん」

悪びれる様子もなくイシエリカは簡単に謝罪する。

「でも、あんまり深く考えてもしょうがないもんだよ、こういう問題はさ。人間生きる時は生きるし、死ぬ時は死ぬんだし？」

さばさばした口調のイシエリカはそう言うが、そう言われて「そうだね」と簡単に返せるほど、私も級友達も人生悟れてなどいない。

けれど、イシエリカはそんな事にも頓着せず、読み終わった本を持って椅子から立ち上がった。

「ちょっと、本返してくるね」

流石に自分の発言で場の雰囲気気まずいものに変ったのを肌で感じたのか、イシエリカは明るく言って教室から出て行った。

「待って、一緒に行く」

アカデミー内でもあってもなるべく一人での行動は控えるように言われているのを思い出し、私はイシエリカの背中を追いかけた。

「どうして、あんな事を言ったの？」

図書室に向かう道で、私は意識せずに訊ねていた。

私の質問にイシエリカは微かに笑う。

「私はね、小さい頃から人が簡単に死ぬような場所で生きてきたのだから、今更自分の周りで人が死んでも対して何にも感じないのよね。それが日常とどう変わるのか良く分からない感じ？」

片手に持った本を弄びながら、イシエリカはどこか遠くを見ながら話し出した。

「・・・ごめん」

私は聞いてはいけない事を聞いた気がして反射的に謝ってしまう。

「なんで謝るの？」

「いや、聞いてちゃいけない家庭の事情に土足で踏み込みそうだったから」

「うーん、家庭の事情って言うよりも一族の事情かな？話すとルツカがドン引きしそうな気はするけど、別に隠すつもりは無いから話すね。実は・・・」

「ちよつと待ったっ！！」

私はイシエリカが笑顔で振り返った瞬間に自分の両耳を両手で塞いで、イシエリカが話始めないように怒鳴った。

「な、何よ」

私の怒鳴り声にイシエリカが怯む。

私は耳から手を離して「ちよつと待ってね」と、もう一度言った。

「先に聞くけど、その話は害のある話？無い話？」

「は？」

「うん。我が家ってさ、家訓で昔から害のある話と、無い話は聞き分けなさいって言われてて」

母と父はどこか人を安心させるおっとりした雰囲気を持つ人たちだった。

そのせいなのか、周囲から無害と思われる事が多く、聞きたくも無い話を良く聞かせられた経験を持つ。

そして、話を聞いた以上、無関係じゃないでしょ。と言わんばかりに厄介事に巻き込まれてきたタイプなのだ。

特に王宮に仕えていると、上の人間の思惑に巻き込まれる事など日常茶飯事だったらしく、おかげで両親には軽く人間不信の気がある。聞かなければ幸せでいられたのに。

関わらなければ、無事だったのに。

そんな思いを何度もしてきて、明日は我が身と脅えながら生きてきた母は、その手の話には特に敏感だった。

勿論、それは私にも言える事で。

「本音で言えば、余計な事には巻き込まれたくないのよ」

私は少々、うんざりした、と言う態度で言った。

「小さい頃から苦労してるのね」

イシエリカが苦笑する。

「まあね。話を聞いちゃって巻き込まれた事の方が多かったから」

「なるほど。でも、安心していいよ。私の話は害は無いから。ドン引きされるだろうけど」

「・・・害が無いのなら、・・・良いわ」

私は、少し悩んで、そう言った。

どうにも、此処で無理矢理止めてもイシエリカは語りだしそうな気配がして、既に諦めていたとも言える。

それに、本人が害が無いというのなら、害は無いのだろう。それは信じるしかないけれど。

ただ、ドン引きすると言う内容が酷く引つかる。

けれど、まあ、ここまで来たら「実は私、人を殺した事があるの」とか「実は人間じゃない」ぐらい言われないと反応が出来なさそう  
な・・・。

そんな事を考えている間に、イシエリカは楽しそうに口を開いていた。

「実はねー、うちの一族って、代々暗殺者の家系なのよ」

「うわ、ドン引き・・・」

明かされる衝撃の事実、とまでは行かずとも、私は歩みを止めた。

「それは信じててその反応なの？それとも信じてないの？」

振り返って、私の眉間に人差し指を向けながらイシエリカが不思議そうな顔をした。

「すっごい、皺寄ってるけど」

「気にしないで。元からこんな顔なのよ」

「いや、違うでしょが」

「そう？今までこの皺が見えなかっただけよ」

「そういうのを『苦虫を噛み潰したような顔』って言うのかしらね？」

「・・・良かったわね。教訓をその目で見れて」

「まったくくだわ」

あはは！と声高に笑い声を上げてイシエリカが歩き出す。

「おかしい！ルツカは面白いわねー」

こちらに背を向けているので表情までは見えないけれど、どうにもイシエリカは本気で爆笑しているらしかった。

「そんなに笑うこと？・・・と、言うか私からしてみれば、今のイシエリカの態度で何処までが真実か一気に分からなくなったわ」

それは、ごめんねー、と、まったく悪びれない態度で謝られても・・・。

「まあ、暗殺者どうのこうのは、信じても、信じなくてもいいわ」

自分で言い出したことなのに、イシエリカはあっさりと言い切った。

「でも、小さい頃から周りで人が簡単に死んでいったのは本当の話・・・だから、ごめんね。私はルツカ達みたいに、いつか死ぬ事を考えて脅えられるような人間じゃないのよ」

「・・・なんだかまるで、いつ死んでもおかしくないって言い方な

のね」

「実際、そうだからね」

あっけらかんと答えるイシエリカに私は返す言葉もなかった。

「毎日、牛や豚を殺す人が一々殺す家畜に感情移入はしないでしょ？」

と、笑顔で言われても簡単に「うん」とは頷けない。

きつとイシエリカは雰囲気だけでも分かりやすいようにそんな例えをだしてくれたのだらう。けれど、

うん。それ、余計に分かりづらいから。

「・・・ごめん、理解不能」

私は早々に降参した。

「ま、いいわ。雰囲気だけでも分かってくれれば」

その雰囲気すらいまいち掴めないままだったけれど、私はこの話を長引かせたくなくて苦笑いを返した。

図書館までは後は長い外廊下をまっすぐに進めば辿り着くといった距離。

「余談なんだけどね、私、絵本作家になりたいのよ」

「…将来なりたい物があるならなんで普通科に来たの？」

目指す職業があつて普通科に入る生徒と言うのは極めて珍しい。

「いや、絵本作家になるのに、他の仕事を隠れ蓑にしないとイケなくてね」。家族、つてか特に姉さんが家業継がないのを大反対でさ。

姉さんは家業にプライド持つてるからさ」

・・・その家業と言うのは、先ほど言っていた『暗殺者』と言うやつだろうか。

私は、あまり真相を知りたくなくて、黙り込んだ。

「でもさ、小さい頃から多忙だった両親の代わりに私の面倒見てくれたのは姉さんで。あ、姉さんとは六歳差なだけどさ。これがまた、出来た人だね。まあ、私は元から家業に対して特に思いいれも無くて。それで、絵本作家になりたいって決意した時に姉さんに相談したのよ。幼い私は姉さんは賛成してくれると思いきんでたんだ

けど、結果は散々でね。怒鳴られた挙句、両親にバラされて、一族会議に連れて行かれて、長老達に滅茶苦茶怒られたんだわ。これが「え？・・・なんで？」

話の流れ的に反射的に相槌を打ってしまいう上に、続きが気になる自分が憎い。

「うん？それがさー、笑っちゃうの。私って実は天才って奴らしいのよ。何かね、一族の中にも過去、数人しか産まれなかったっていう、レアなもんだっいたらしくて、小さい時から親の仕事は良く手伝わされたんだけど、私としては周りの子もそんな感じだと思ってたから気にしてなくてね。でも、その一件で実は自分が他の子と違う目で周りの大人に見られてたって気づいて。でも、そんな私が家業を継がないで他の仕事したいとか言い出したわけだから、親も姉さんも長老たちも焦ったみたいで」

「よく、そんな環境で大陸に来てアカデミーに入れたわね」  
話の流れからすれば、イシエリカは一族にとっては必要不可欠な子供だった筈だ。

それが、一人で国を離れて、家業も手伝わずにアカデミーで勉強に励んでいるのだから、結局は大人たちが折れて送り出したと言う事だろう。

けれど、イシエリカは「てへっ」と言う感じの笑い方をした後に視線を逸らしながら気まずそうに一言。

「だから、五月蠅いの黙らせて逃げてきちゃった」と、可愛らしく言った。

「だ、黙らせて来た・・・んだ」  
どう、黙らせてきたのかは聞いてはいけない気がして、私は引き攣りそうになる顔を無理矢理笑顔に変えた。

「うん。でも、その姉さんが一番凄くてね。一応、急所外して追ってこられない程度の傷を負わせたんだけど、姉さんは姉さんで異様に治癒能力が高くて。絵本作家になって名前とか出回ったら居場所を突き止められそうだし」

「・・・だから、隠れ蓑の職業が必要って事？」

「そ。だって、私が絵本作家になりたいの、一族は全員知ってるしね」

「・・・名前が売れる自身があるんだ」

「えー。いやだな、ルツカ。私が売れないわけ無いじゃん」

さも、当然。と言わんばかりのイシエリカに私はただ呆然とするばかりだった。

何処から来るの？その自信。と思う。

思うけれど、口にはしない。

口にして聞いてしまったら、それはそれで、何か理解できない答えが返ってきてそうで、怖い。

と、言うか、今の時点で色々理解できない話が多すぎて軽く眩暈すら起こしていた私の本能は、これ以上頭を悩ませるのは得策では無いと結論を出していた。

既に、一人は危ないからとイシエリカに付いて来た事を後悔し始め、鈍痛を訴えるこめかみを指で軽く揉んでいた時だった。

「・・・誰？」

ふいに、低い声で呟いてイシエリカが歩みを止めた。

何が？と思つて顔を上げた先には、図書館までの回廊の真ん中でこちらを向いて立つ少女が一人。

一瞬、地毛なのかどうなのかと、どうでも良いことで悩んでしまった。

少女は見るも鮮やかな緑色の髪を長く腰の下まで伸ばしており、それが無造作に肩から流れていた。普通に考えれば地毛とは思われないが、染めているようにも見えない。

「アカデミーの関係者じゃないわね」

真つ直ぐに目の前の少女を見据えてイシエリカがそんな呟きを漏らした。

「ん？・・・それどころか、人間でもないか」

「え？」

ふいに聞こえた台詞に驚いてイシエリカを見れば、その横顔は嬉しそうに笑っていた。

「・・・ああ、見つけた。“イエル・シシア”」

今度は聞きなれない声が響き、慌てて声の方を見れば、今まで俯いていた少女が顔を上げてこちらを見ていた。

髪と同じ、鮮やかな緑色の瞳。

焦点の合わない、どこか虚ろなそれが、こちらを見据えている。

「ここで、“イエル”を手に入れば、後は四つ・・・“イエル”でやっと半分なのね」

どうせなら、隣も“シシア”なら良かったのに。少女はそんな事を呟いて、ゆっくりと右手を私達に向けてくる。

「騒がないでね。五月蠅いと殺してしまいたくなるの」

やたらと物騒な事を言って、少女は虚ろな瞳のまま微笑んだ。

### ムルキベルの牢獄【3】

「ルツカってさ、ワイルドな知り合い作るの得意よね」  
少女から視線を離さないまま、イシエリカが言った。

「いや、知り合いじゃないよ。あんな危ない子」

私も視線を離さないまま、そう答えた。

冗談めかしたイシエリカの言葉につられる様に、ふざけた感じに言おうと思った言葉は、ものの見事に中途半端に引き攣っていて。

視線を外した瞬間に、隙を少しでも見せた瞬間に喉元を切り裂かれそうな予感がした。

背中を、一筋の汗が流れ落ちる。

緊張しすぎて、こめかみを脈打つ音が五月蠅い。

この場を、どう乗り切るか。

必死にその考えを巡らしていた私の耳に聞こえたのは、イシエリカの楽しそうな声だった。

「ルツカ、逃げてもいいよ。ってか、是非とも逃げて誰か呼んで来てくれると助かる」

「え？」

唐突な申し出に私は思わず少女から視線を外して、イシエリカを見ている。

その横顔は不敵な微笑を浮かべていて、私は目が離せない。

「いや、負ける気はしないけど、素手なのが、ちと、痛い。出来れば武器が欲しいな。ねえ、ルツカ。悪いんだけど、ついでに部屋にあるワインレッドのケースを持ってきてくれないかな？あれがあれば、もっと楽に倒せると思うし」

「・・・でも、あの子って此処最近の殺人事件の犯人だよな？」

「間違いなくね。血の匂いがするわ。嗅ぎ慣れた、あの匂い」

そこまで言うと、イシエリカは一步前に踏み出した。

そして、囁くような声で、

「三つ数えたら行つて」と、言われた。  
私は頷きつつ、心の中で三つ数え、少女とは反対の方向へと全速力で駆け出した。  
考えも何もあつたもんじゃない。  
死にたくない切に願つた私は、振り返る事もなく、ただ前へ前へと走り続けた。

\*

「イエル、逃がさないわ」  
呟いた、次の瞬間。

リティリーズは真つ直ぐに視線を走り去る少女の背中に固定したまま、身体を動かしていた。

それは、常人には見えない速度。

常人には止められない速度。

なのに。

「だから、駄目だつて」

そんな陽気な声とともに、横から足をなぎ払われて、体が瞬間的に宙に浮く。

「・・・邪魔」

ふわり、と舞つた髪の間から視線を横に逸らせば、そこには追い求めていた少女と共に居た、別の少女が笑顔を見せていた。  
少女の一つに纏められた紺色の髪が波打つ。

「人で無いものと戦うのは、久しぶりだわ」

嬉しそうに呟いた少女の右腕が、リティリーズの頭部を目掛けて振り下ろされる。

けれど、その動きをリティリーズは完全に把握している。

少し首を傾げれば、簡単に避ける事が出来るような攻撃。もし当たったとしても、特にダメージは受けないだろう。

そう判断したりティリーズは避ける事を止めて、逆に身体を前に押し出した。

少女が反射的に身を引いた隙に、一発で片付けようと考えたのだ。

リテイリーズの顔が至近距離に近づき、少女は目を見開いて驚いたけれども、それも一瞬の事。

「常套手段だね」

にやり、と歪めた唇から、そんな言葉が呟かれる。

その驚きすら演技とし、少女は躊躇いなく右腕を振り下ろし、その衝撃は確かにリテイリーズの脳を揺さぶった。

否、通常では到底ありえない筈なのに、彼女の脳は確かに揺さぶられた。

「くっ……」

低く短い呻き声を発して、リテイリーズは咄嗟に少女から離れた。本能が、警告を出していた。

「うわー、アレでも倒れないか。結構本気だったのに。ってか、アంత、相当石頭だよな」

視界がぶれる中、姿勢を低くして十メートル先に佇む少女を見やれば、少女は右手を開いたり握ったりしながら笑っていた。

「でも、流石に効くでしょ？まあ、殺す気でやったんだから、効いてくれなきゃ困るんだけどね？」

「お前……」

あはは、と少女が暢気な笑い声を上げる。

それは、耳障りな声。

リテイリーズが睨みつけても少女は微塵も気にしない。

それどころか、

「さあて、化け物さん。そろそろ本気出してくれると嬉しいんだけど？」

などと、言ったりティリーズを煽り始めた。

「狭い狭い人間の世界で、力を抑えて一方的に獲物を甚振るのは楽しかった？でも、私が見るに、アンタはそういう性分でも無さそうだわ」

「・・・弱者が」

「あ。人間の事を弱者って言うって事は、アンタ結構高位の魔物でしょ？もしかして、竜だったりしてね」

「・・・それが、どうした」

正体を明かしたところで、特に困る事は無い。

この少女を殺してしまえば、自分の正体を知るものは誰も居なくなる。

今までもそうやってきたのだ。

そう考えてリテイリーズは少女の言葉を肯定した。

「あー、やっぱりね！！・・・まだ、竜って殺した事無いんだよね。だからさ、ちよっと試させてよ」

少女が悪戯っ子のように目を細めて微笑んだ。

\*

盛大な爆音が遙か後方で轟いた。

地面の振動で体勢を崩し、私の体が大きくよろめく。けれど、それでも必死に両足を前に前にと動かして私は走っていた。

「勘弁してよっ！！こちとらどっちかと言うと文系なのよっ！」

そんな軽口も叩けるから、まだ大丈夫。

体力は無いけど、気迫は充分。

それに、アカデミーに来てから運動量は確かに減ったけれど、それでもフイーリに居た頃はアーティアカと野を駆け回っていたくらいだ。

基礎体力には自信が・・・少しはある。

と言うか、現状、軽口でも叩いて気を逸らさなければ、イシエリカと少女の事ばかり考えて足を止めてしまいそうになる自分が嫌だった。

最悪、泣き叫びながら何処かへ逃げ出してしまい衝動に駆られる。

「でも、助けを呼んで、イシエリカの武器も持って来ないと駄目なのよね!」

殆ど叫び声で自分のやるべき事を言葉にして再確認。

逃げ出す前にやる事がある。

そう自分に言い聞かせて私は足を動かし続けた。

怖い、とか、嫌だ、とか。

何で自分が狙われるの?とか。

私も捕まったら殺されるの?!?とか。

そんな疑問や恐怖なんかが、隙について心を満たしてしまいそうだった。

イシエリカが庇ってくれて、「逃げて良いよ」って言われたから逃げて。

でも、そこには絶対的な信頼とか固い友情とか、そんなもの微塵も無くて。

死にたくないから。

生きたいから。

イシエリカの「逃げて良いよ」って言葉に、ただ甘えて私は逃げた。狙われているのは私で、追いかけられているのも私らしくて。

何でそんな目に合うのか理由なんて知らないし、出来れば知りたくも無い。

私には関係の無いことじゃないの?って思う。

けど、私以上にイシエリカはもつと関係ない筈。

なのに、私はイシエリカを置いて逃げた。

正確に言うのなら、イシエリカが望んであの場に残ったのだけれど。私は一度も「一緒に逃げよう」なんて言わなかった。

・・・違う。

・・・言えなかった。言わなかった。

イシエリカの言葉に確かに安堵した自分が居た。

「・・・っ、最低だよね、私って」

知らず知らずの内に唇を噛み締めすぎて血が滲んでいた。

その傷口に更に歯が当たって、地味に痛い。

でも、それが何だっけ言うんだらう。

何も無いときは教室で、これぐらいの傷で痛いとか騒いだりするけど、今はその時の事すら他人事のように。

馬鹿だな、自分。って素直に思った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8696c/>

---

ムルキベルの牢獄

2010年11月9日06時20分発行